

授業を考える(4)

・・・主体性は育てるもの・・・

1年生は今、1年間の学校生活を振り返る学習をしています。授業で蓄えたことを発表するための授業を見ました。一人ひとり発表の内容は異なっていますが成長の自負はありますし、仲間のこれまでの努力と成果を見続けているので発表を誇らしいものとしていました。また、いちばん速く計算ができるといった競争型ではなく、上まで上がるのが怖かった遊具を克服した、ていねいな字が書けたという共感型の自己肯定感を持つことをめあてにしているので、主体的な子どもの学びのある授業でした。

かつて、鉄棒の足かけ回りができないと担任の私に訴えてくる子どもがいました。それをとなりで見ていたIくんは頭をやや傾けて私を見ています。聞けば、「文句を言うのがふしぎ。やればいいのに」と言いました。Iくんは鉄棒も一輪車も算数も国語もよくできましたが、初めからできるわけではありません。できるかできないかはやるかやらないかで決まります。困難なことをやりきるには痛みや苦しみは伴いますが、それを苦にせず楽しんでいるかのようでした。

一方、訴えてきた子はやる気がないわけではありません。努力をしているのにできないと考えるなら、取りあえず努力をやめてみればどうかと伝えました。しかし、やめるのは嫌だと言います。これは何かあるなと思いました。どうやら、親御さんから練習をしているのかと問い詰められていたようでした。他の人はできているのだからがんばりなさいと言われていました。努力が足りない、努力すれば必ずできると心身を縛っていたようです。

これでは自分事になりません。大人の目の色を伺って、大人の心を読んで自分の行動を決めるわけですから。主体的というのは、自分の事として心の底から湧き上がってくる意欲をもって学習行動を起こすことです。目指すモデルやライバルがいても自分事でなければ力は伸びません。主体的にやって自己実現を重ねれば、いつかきつと希望を持つ人になります。こうやってみようかと構想し、ああでもないこうでもないとして試行と修正を繰り返す、私はこれだと決断します。つまり、思考力を鍛え上げることになります。

ところが、教師の授業で主体的な子どもが影をひそめることがあります。授業の質が低いために賢くなれたと感じない授業をしていると、小学生は別の事柄に心を向けてしまうものです。少しでもいいので、今日の授業は昨日よりわかった、昨日よりできた、授業で賢くなれると子どもが手ごたえを感じる事が肝要です。子どもが主体的になれば手ごたえのある授業ができます。真っすぐに向けられた眼差しは教師の力を奮い立たせます。教師と子どもは真剣に考え、45分の授業が終わって教師はへとへとになります。こうではなくてこう問えば良かったと反省します。未来を見るのが子どもですから、さっと切り替えて校庭に遊びに出ますが、ときには考えを言いに来きます。ひとりで考えこんでいることもノートに考えを書いていることもあります。教師と子どもが自分事として授業を行えば子どもは実力を伸ばします。そのとき教師は子どもに鍛えられる感覚になります。意欲はだれでも持ちます。主体性はだれにもありません。主体性は授業で育てるものです。